

シャトーブリアンの第二の回心

駿 河 昌 樹

- 1 はじめに
- 2 フランス大使側のグループ
- 3 ローマでのシャトーブリアン
- 4 シャトーブリアンの大失策
- 5 大失策の事後処理とフォンターヌらの助け
- 6 ロシアに赴いての仕事の計画
- 7 ヴァレ共和国のフランス代表職
- 8 アンギャン公処刑とヴァレ共和国フランス代表職の辞退
- 9 シャトーブリアンの第二の回心

1 はじめに

第一執政ナポレオン・ボナパルト Napoléon Bonaparte と外務大臣タレイラン Talleyrand によって直々に任命され、1803年5月に、ローマのフランス大使館へ一等書記官 premier secrétaire として赴いたシャトーブリアン François-René de Chateaubriand は、本来ならば、外交や政治の世界への輝かしいデビューを飾りうるはずだったが、彼自身の気質から来る逸脱行為によって、このデビューは大失敗に終わることになる。

ところが、この失敗によってボナパルトから遠ざけられることで、シャトーブリアンはむしろボナパルト派から王党派に完全に移行し、後の王政復古期の政治家としての道が準備されていくことになるため、彼の人生を

追っていく際には見落とせない時期であるといえる。

本稿では、シャトーブリアンが大きな変貌を遂げることになるこの時期について概観していきたい。

2 フランス大使側のグループ

この時のフランス大使館側のメンバーを見ておく。

フランス大使はジョゼフ・フェス Joseph Fesch であり、シャトーブリアンは一等書記官だった。

フェスについては、拙論『シャトーブリアンの駐伊フランス大使館一等書記官任官』⁽¹⁾に詳述したので、そちらを参照されたいが、ナポレオン・ボナパルトの母の腹違いの弟で、叔父にあたる近親者である。

若くして司祭となったが、革命が始まるとコルシカ島における司祭の公民宣言の運動の推進者となり、共和国への忠誠を表明した。ナポレオンのトゥーロン攻囲 Siège de Toulon やイタリア遠征とともに、フェスは資材供給の仕事に就くようになり、富を築く。1802年には聖職に戻り、リヨンの大司教、さらに枢機卿となっていた。勤勉な性格だったが、強情で、威圧的でもあり、富への執着が強かったらしい。思索型ではなく、行動型の人間で、他人の蔭に置かれるのには耐えられず、疑い深く、逆上することも多かった。

外交においては素人であり、過去の行状はヴァチカンから見れば問題があったが、フランスをふたたびカトリックの国にできるコンコルダを結んだばかりでもあり、フェスのそうした部分についてはヴァチカンは寛大な態度に出ると予想された。

これに、ギロン神父 l'abbé Guillon、ボンヌヴィ神父 l'abbé Bonnevie、リュコット神父 l'abbé Lucotte の三人が随行したが、どれも癖のある者たちだった。

ギロン神父はパリの聖職者の中での名士であり、おそらく、サン＝シ

ユルピス教会の上長エムリ l'abbé Emery の推挽による。有能だったが、問題もあった。ロベスピエールが行った最高存在と魂の不死についての演説を書いたのは自分だったと自慢したりしていた。

ボンヌヴィ神父はシャロンの助任司祭で、王党派であることを公言していた。革命時には聖職者民事基本法による宣誓を拒否し、亡命していた。

もっとも控えめだったのはリュコット神父だが、リヨンの大司教座の幹事だった時にフェスと知りあい、公使館の主計官となり、フェスを支えるようになった。

3 ローマでのシャトーブリアン

一等書記官としてローマのフランス大使館に赴任したシャトーブリアンの日常は閑職のそれで、ずいぶんとのんびりしたものだだった。

そもそも、16世紀以降の法王たちによる美化の努力にもかかわらず、ローマという都市自体がまだまだ田舎じみでいて、素晴らしい歴史的建造物や記念碑のまわりに、民衆の粗末な住まいが取り巻いているという状態だった。

『墓の彼方からの回想 *Mémoires d'outre-tombe*』によれば、テベレ川沿いのランセロッティ宮殿に到着した当初から、シャトーブリアンは次のような光景に遭遇することになった。

フェス枢機卿 Cardinal Fesch はテベレ川のすぐ近くにランセロッティ宮殿を借りてあった。後になって、私はそこでランセロッティ公爵夫人に会ったことがある。私は最上階の部屋を与えられた。そこに入るや否や、たいへんな数の蚤が私の足に飛びついてきて、私の白い長ズボンに真っ黒になってしまった。ボンヌヴィ神父と私で、できるかぎりの努力をして室内の清掃をした。私は、ロンドン亡命中に住んだニューロードの、犬小屋のような私の部屋を思い出した。こんなふうには、わが極貧時代のことが思い出されるのも悪くはなかった⁽²⁾。

ここでの彼の仕事といえば、パスポートの交付の際に、あのひどく癖のある字体で署名をするという程度のことで、他にも多少の仕事はあったものの、それ以外は有り余る時間を持て余すことになる。

私は、パスポートの交付作業と、その他、同じように重要な任務を始めることになった。私の書く文字は私の能力の邪魔をする体のもので、フェス枢機卿は私の署名を見ると肩をすくめて嘆息した。私の中空の部屋でやることはほとんどないに等しく、上から街の屋根を眺めながら、私に合図する洗濯女たちを見たり、声を鍛えながら、いつまでもソルフェージュを私に聞かせ続ける未来の歌姫を見たりしていた。ときどき葬列が通ったりすると、むしろ気晴らしになって嬉しいくらいだった⁽³⁾。

4 シャトーブリアンの大失策

『墓の彼方からの回想』では、こうした記述の後で、この時にシャトーブリアン自身が犯した過失が、さも何事でもなかったかのように、それとなく語られていく。

私は大きな過ちをやらかしてしまった。なんら疑うこともなしに、有力者たちに挨拶に行かなければならない、と私は考えた。遠慮もなく、私はサルデーニャ王国の退位した国王に表敬訪問を行った。この常軌を逸した行動は、悪口雑言のすさまじい嵐を巻き起こした。外交官たちはみな口を閉ざした。「あいつはもう駄目だな、もう駄目だ」と取り巻きたちや随行員たちはくり返して、それが誰であれ、とにかくも誰かに災難が降りかかったと見るや、わざわざご親切に披露してくれるような喜びを露わにした。外交においては愚か者のくせに、私よりも上に立っていると思って、愚鈍さの高見から私を見下さないでいる者たちは、もう、ひとりもないほどだった。私などまだ何者でもなく、なんの重要さもないというのに、私が挫折していくのを誰もが望んでいた。どうであれ、誰かが挫折するというのは、いつも楽しいものなのである。私はといえば、いつもの単純さから、私の罪など予測できないでいたし、それ以降と同じく、どんな地位も歯牙にもかけないところがこの時にもあったと言えよう。世間は、私が王たちにたいそう重きを置いていると見ていたようだが、私の目には、彼らの重

要性など不幸なものであった。私の恐るべき愚行はローマからパリに伝えられたが、幸いなことには、私はボナパルト自身と関わりがあった。私を破滅させるはずのものが、むしろ、私を救ったのである⁽⁴⁾。

シャトーブリアンがこのように回想録に書くのは、ローマに一等書記官として赴いた時点からすでに35年後のことであり、若い頃の自分の失敗を、かなり余裕とユーモアを持って記しているといえよう。王政復古期のルイ18世治下に大臣を歴任し、重要な外交官職を務めることにもなった彼からすれば、外交デビュー時に自らが犯した大失策を振り返るのは、懐かしくも微笑ましいことであったかもしれない。

しかしながら、この時のシャトーブリアンの失敗がどれほど大きなものだったかは、現代のフランスの元外交官で、外交官としてのシャトーブリアンの業績を研究したジャック＝アラン・ド・セドウ Jacques-Alain de Sédouy の指摘を読むと、そう簡単には看過できないほどのものだったことがわかる⁽⁵⁾。

ピエモン-サルデーニャ王国 Royaume de Piémont-Sardaigne は、1796年にサヴォワ Savoie とニース Nice をフランスに奪われ、1798年にはピエモン Piémont も奪われ、1802年には6つの地方に分割されて、最も貧しいサルデーニャ Sardinie にのみ存続しているだけになっていた。ヴィットーリオ・エマヌエーレ1世 Victor-Emmanuel I^{er} はサルデーニャには住もうともせずにローマに居を構え、フランスに敵意を持つ亡命者たちや配下の者たちに囲まれて暮らしていた。彼は、フランス共和国への反発と地中海地域への野心からロシア皇帝が提供する支援を受け入れており、ロシア大使を身近に置き、他方、サルデーニャ代表として、王党派、保守主義者、反革命家として有名なジョゼフ・ド・メーストル伯爵 Joseph de Maistre をサンクト・ペテルブルクに派遣していた。

これに加えて、この時、フランスとイギリスの戦争が始まっており、すでにマルタ島に進駐していたイギリス軍は、イタリアに対する軍事拠点としてサルデーニャを見ていた。

こういう時期であったため、フランス共和国としては、最高度の注意と配慮を以て、サルデーニャ国王に対する必要があった。外務大臣タレイランは、大使のフェスにその旨の指示を出してもいた。

こういう状況下で、無邪気とさえ言えるほどの無思慮さでシャトーブリアンが行った表敬訪問は、まさに紛れもない外交上の失策であった。しかも、フランス大使であるフェス枢機卿の指示もなく、同意もなく、自分自身がフランス共和国の代表であるかのように行われたことであるため、この過失の度合いはさらに大きかった。

5 大失策の事後処理とフォンターヌらの助け

自身の失敗の大きさに気づいたシャトーブリアンは、すぐにタレイランに報告を送った。国王を訪問したとは書かずに、単に、国王に紹介されたと書いている。純粹に個人的な資格で文学者として会ったものであり、国王と王妃とは文学の話しかしなかったと伝えている。

外務大臣タレイランとしては、もちろん、この職員を断罪せざるをえないが、これに対して、シャトーブリアンは、愛人であったド・ボーモン伯爵夫人 comtesse de Beaumont に助けを求めた。18世紀にスペイン大使、ブルターニュ国王軍指揮官、外務大臣などを務めた重要人物モンモラン＝サン＝テラン伯爵 comte de Montmorin-Saint-Hérem の娘で、広い人脈を持ち、シャトーブリアンが『キリスト教精髓 Génie du Christianisme』を完成させる際に親身になって援助をした人物である。

シャトーブリアンは、ド・ボーモン夫人を介して、自分の友人であり庇護者でもあるフォンターヌ Jean-Pierre Louis de Fontanes に取りなしをしてもらえるように求めた。フォンターヌはナポレオンのプレーンともいえる作家で、いわば、外務大臣のタレイランのさらに上から圧力をかけてもらえるように動こうとしたと思われる。彼自身の親友なのだから、直接にフォンターヌに頼めばいいようなものだが、自分の犯した過失のあまり

の大きさに怯んだのかもしれない。フォンターヌはこの頃昇進が続いており、自分のナポレオンとの信頼関係を使って、シャトーブリアンが一等書記官の職に就くように動いた経緯もあったことから、今回のシャトーブリアンの失策には、彼をしてひどく不安にさせるものがあったのは難くない。

大使のフェスもシャトーブリアンについての不快感を公言するようになり、また、長い間イタリア外交を取り仕切ってきたフランソワ・カコ François Cacault などの外交のプロたちも、ここぞとばかりにシャトーブリアン批判に傾いたため、ローマでもパリでも、シャトーブリアンの評価は甚だしく下落していった。

こうした状況の中で、フォンターヌは、ナポレオンの妹エリザ・バッキオッキ Eliza Bacciocchi やタレイラン、さらにはボナパルトの妻ジョゼフィーヌ Joséphine にまで取りなしを頼み、少しでも騒ぎを小さくしていくよう、揉み消し工作に努めた。

シャトーブリアン自身も、ボナパルトに向けて要約書を書き送り、その中で、フェス大使の吝嗇さや、ヴァチカンの仕掛けてくる策略に対する大使の対処能力の欠如、また、現地の政治状況への大使の無知さを批判するとともに、自分が「大使に対する自然な助言者であり友」⁽⁶⁾として、随行員の書記官職を維持しようとしていることを伝えようとしている。しかし、フェスが、ナポレオンの幼少期から親しい叔父であることや、そもそも書記官職が大使の「助言者である友」でなどないはずであるのを考えれば、とんでもない内容の報告を、他ならぬボナパルト自身に対してシャトーブリアンは行ったことになり、これもまた、大失策であると言うほかない。第一執政ボナパルト自身、自分がとんでもない人事を行ってしまったことを嘆く事態にまでなった。

他方、シャトーブリアンは、周囲が自分に対して敵対的になっているのを痛感して、ローマにいる外国人たちや亡命者たちのサークルに頻繁に顔を出すようになる。そこにたむろする人々は、多かれ少なかれ、現在のパ

りの政権に対し反感や敵意を持つ人々だった。その中には、ルイ・ベルタン Louis Bertin もいた。ジュルナル・デ・デバ紙 Journal des débats の社主である人物で、イギリスに益するスパイ容疑で逮捕・投獄され、エルバ島 l'île d'Elbe へも流されたが、彼はそこからイタリアに流れ着いてきていた。シャトーブリアンとは、以後、ずっと関わり続ける人物である。

シャトーブリアンの件で、フォンターヌが最初にボナパルトと話した際には、ボナパルトは激怒し、シャトーブリアンをパリまで、「足と手を縛って荷車で護送」し⁷⁾、タンブル Temple 牢獄へ幽閉せよ、と叫んだらしい。セント＝ヘレナ島へ送れ、とさえ言ったらしい。

とはいえ、それでも、ボナパルトの多忙さに加え、かねてから肺病の末期状態にあった、ボナパルトも親しかったド・ボーモン夫人のローマでの死がシャトーブリアンには幸いし、事態は次第に収束に向かっていった。

6 ロシアに赴いての仕事の計画

シャトーブリアンは自費でド・ボーモン夫人の墓所を建造したが、それには当時の額で9000フランかかり、彼の一年間の給与である8000フランを越える額だった。一等書記官の仕事における失策もあって、彼はすでに人生の終わりに達したと諦め、回想録を書き始める気になっていたが、ともあれ、次の仕事を見つけなければならぬと考えて、ロシアへの亡命などを検討し出した。

ローマのロシア人の集団と関係を持つようになっていたが、その中心にいたのはロシア皇帝の義弟であるメクランブル＝シュヴラン王子 Mecklembourg-Schwerin と、皇帝がローマに派遣していたふたりの外交官だった。

シャトーブリアンは、将来のニコライ1世となるロシア王子の養育掛の職や、サンクト・ペテルブルクのアカデミー会員などの職に就いて、10000フランほどの給与を得ようと考えたりもしたようだが、フランスの

法律がこれを阻んでいた。それは革命暦8年の憲法の第4条で、外国から手当や仕事を受けた際にはフランス国籍を失う、というものだった。このため、身動きは取れず、屈辱を耐え忍んでローマに居続けるか、パリに戻って無給の身となる他はない状態だった。

7 ヴァレ共和国のフランス代表職

しかしながら、フォンターヌとエリザ・バッキオッキの奔走のおかげで、奇跡が起きる。ヴァレ共和国 République du Valais のフランス代表に任じられることが決まったのだ。これは、シャトーブリアンにとってみれば、特筆するほどの要職とは映らず、任地も「恐ろしいような穴」と呼びたくなるような辺鄙な地域だったが、それでも書記官でなどなく、大使の地位に当たる。ボナパルトにとってこの国は、イタリアとの間の軍事的連携を監視する地点にあたり、その点、重要であることに変わりはなかった。

友人たちの必死の奔走でなんとか手に入った地位であるにもかかわらず、シャトーブリアンは、回想録にはこのように記すことになる。

第一執政は、私が第一の地位にしか相応しくない人種で、人に交じらせないようにはしないといけないと理解した。しかし、空いている場所がなかったので、私の孤独な性質や独立を重んじる性質を考えた上で、場所をひとつ新設し、私をアルプスの中に置くことにしたのだった。彼が私に与えたのは、急流の流れるカトリックの共和国である。ローヌ川と我らのフランス、イタリアへ上っていく他の国々、あの険しい道を私の前に開いているシンプロン峠（……）。バッキオッキ夫人は、手に入れうる外交官の要職が確保された旨をフォンターヌから私に通知させてきた。私はこうして、期待もしなかったし、望みもしなかった最初の外交上の勝利を手に入れたというわけだった⁽⁸⁾。

シャトーブリアンは1804年1月に正式にこの職を受け、ナポリでしばらく休暇を取った後、2月15日にパリに帰った。

25日にタレイランのところに赴くが、シャトーブリアンは、ここでも事前に謁見を乞うことをせず、拒絶される。翌日に、謁見を乞う手紙を書き、さらに外務大臣がシャトーブリアンをボナパルトに引き合わせてくれるよう頼むが、ここでも、裏で動いてくれたのはフォンターヌだった。外務大臣タレイランとは3月はじめに会い、ボナパルトとは3月18日に会うことになったが、この時は、チュイルリーでのミサの後の、他の大勢の人々もいっしょの場所であった。ボナパルトは、シャトーブリアンには声ひとつかけなかった。

シャトーブリアンはこの時点ではわかっていなかったが、じつはフランス大使のフェスが、裏で強烈な攻撃をしかけていた。2月4日、フェスは、長年の協力者でもある甥のボナパルトに、次のような長い報告を書き送っていた。

シャトーブリアンがバッキオッキ夫人から年金を貰っており、庇護を受けているといっても、あれはあなたの友人とは全く言えない男です。あなたがどこかへ彼を送る場合には、その場所で彼を監視させておかないと、いくらもしないうちに、亡命者たちやあなたの政府に不満を持つ者たちのために彼がなんでもやるのを確信することになるでしょう。この策謀家は危険人物でもあります⁽⁹⁾。

ローマからパリに帰ったシャトーブリアンは、才能ある作家とはいえ、外交デビューでしくじった人物と見なされるばかりだった。パリの世論もずいぶん変化してしまっており、1802年3月にイギリスと結ばれたアミアン講和条約も破棄されて、新たな宣戦布告がなされていた。王党派たちと亡命者たちはまた活動を始めており、不満分子として、マセナ Massena、ベルナドット Bernadotte、モロー Moreau らの将軍の名が挙がるようになっていた。

シャトーブリアンは、王党派のサロンに出入りしていたので、こうした動きには敏感にならざるをえなかった。ジョゼフ・フーシェ Joseph Fouché の愛人だったデルフィーヌ・ド・キュスティーヌ Delphine de Cus-

tine とシャトーブリアンとの愛人関係が始まっていたが、彼女はボナパルト体制への敵対者であり、それを公言して憚らなかった。

8 アンギャン公処刑とヴァレ共和国フランス代表職の辞退

ボナパルトを誘拐してある王族を擁立するという、王党派のカドゥアル Georges Cadoudal による陰謀が発覚したとされ、カドゥアルの他、モロー Jean-Victor Moreau、ピシュグリュ Charles Pichegru などの逮捕も続くなか、シャトーブリアンは、公然と王党派のサロンに出入りし続けていた。彼は、かつてのジャコバン派に被害を被った者として、また、現政権を批判する者として、自己表明をしていた。ヴァレ共和国でのフランス代表の仕事が決まり、それによって12000フランの年収が約束されていたにもかかわらず、このような態度をとるとするのは、やはり、アルプスの僻地に送られることに大きな不満があったのかもしれない。長い間別れて暮らしていた妻といっしょに任地に赴かねばならないのも、シャトーブリアンにとっては相当不愉快なことだったらしくもある。

そういうところへ、3月21日、ブルボン家の最後のコンデ公であるアンギャン公 duc d'Enghien 処刑の報が入る。

私は大通りを下りて行き、アンバリッドのテラスやルイ16世橋、チュイルリーの庭園を通り抜け、そこから、マルザン翼の近くの、今日ではリヴォリ通りに向かって開いている鉄柵に出た。11時から正午のあいだ頃だったが、そこで、男と女が広報を叫んでいるのが聞こえた。「ヴァンセンヌ牢獄に招集された特別軍事法廷の判決。1772年8月2日にシャンティで出生したルイ＝アントワヌ＝アンリ・ド・ブルボンなる者を死刑に処す」。

この大声は、稲妻のように私に落ちた。これは私の人生を変えた。同じように、ボナパルトの人生も変えた。私は家に戻り、シャトーブリアン夫人に「アンギャン公が銃殺された」と告げた。私は机の前に座り、辞職届を書き出した⁽¹⁰⁾。

こうして、ボナパルトの元でのシャトーブリアンの外交職のキャリアは

終わりを告げることになる。この後、10年間、彼は公職を離れて暮らすことになり、創作活動と、中近東やスペインへの旅などに時間を費やすことになる。

9 シャトーブリアンの第二の回心

アンギャン公処刑を伝える声を聞いた際の「この大声は、稲妻のように私に落ちた。これは私の人生を変えた」という表現は、『キリスト教精髓 *Génie du christianisme*』の第一版の序文にあったカトリック信仰への回心の有名な言葉、「私は泣いた、そして信じた (J'ai pleuré, et j'ai cru)」⁽¹¹⁾を思い出させるところがある。

それまで、イギリス亡命からフランスへ戻る契機となったボナパルトのカトリック復権政策、および、亡命者の復権政策や、ボナパルト派の友人たちに助けられることなどによって流行作家としての地位を得られてきた経緯があったため、シャトーブリアンはボナパルトに心を寄せるかたちで、ボナパルト派として生きてきていたが、アンギャン公の処刑を契機に、彼からボナパルトへの好意や敬意が一気に剥落し、カトリック信仰と、もともとのブルボン家に忠誠を誓った貴族としての部分が、人格の中心を占めるようになったのだと、とりあえずは見ておくことができるだろう。

シャトーブリアンは、もともと貴族の末っ子としてフランス革命に遭遇したが、若かったその時点では、思想的にはルソー主義や啓蒙主義に近いところが彼にはあり、カトリック信仰によって動かされる部分は希薄だった。ヴェルサイユ宮殿で、ルイ16世やマリー・アントワネットに出会ったりもしていたが、ブルボン家のための強い忠誠心を持っていたとは言えない。兄の結婚相手の父は、有名なギヨーム＝クレティアン・ド・ラモワニオン・ド・マルゼルブ (Guillaume-Chrétien de Lamoignon de Malesherbes) で、出版統制局長時代には、啓蒙主義の出版物にあえて出版許

可を与え続けたほどの開明派であり、シャトーブリアンはこの人物の勧めに従ってアメリカ合衆国への旅に出、ジョージ・ワシントン George Washington にマルゼルブの親書を手渡したりさえしている。

フランス革命の勃発を彼が知るのとはアメリカにいる時だったが、急いで帰国すると、王子たちの率いる反革命軍に身を置いて、革命勢力との戦争に参加することになる。彼がブルボン家のために本当に動き始めるのは、この時からである。

その後、彼の精神を支えたのはブルボン家への忠誠心だったが、カトリック信仰は、それほど回復されたわけではなかった。戦乱や戦場での大怪我などを経て命からがらロンドンに亡命した後で、フランス革命についての考察を、古代ギリシアの革命事例を参照しながら行おうとしているが、この時点では、革命について客観的・中立的な視点に立とうとしており、カトリックの側にはっきり立って意見表明を行うようなことは、まだしていない。

先に見た「私は泣いた、そして信じた (J'ai pleuré, et j'ai cru)」という言葉は、革命勢力によって投獄された老母の死をロンドンで聞き知った時の気持ちを思い出して発せられたものだが、仮にこの表現自体にはある程度大げさなところがあるものであったとしても、このあたりから、カトリック信仰が精神の軸になっていったのは確かなところだろうと思われる。ロンドン亡命中の後期にあっては、精神的支柱は、カトリック信仰とブルボン家への忠誠心となっていたはずである。

第一執政となったボナパルトによって、フランスへの帰還が許され、また、著作の『キリスト教精髄』がボナパルトの政策に合致するものとして好評を得、一大ベストセラーになった際には、やむを得ず、シャトーブリアンはボナパルト派のように振る舞うことになり、著作の一部も、ボナパルトの政策に合うように変更されて出版されることになった。

しかし、それらは、フランスに戻って生きのびるための方便であったわけで、いずれは剥がれ落ちる運命にあったともいえるだろう。そうなれ

ば、表われ出てくるのは、ボナパルト派の仮面が被さってくる前のブルボン家への忠誠心とカトリック信仰だけになり、中期以降のシャトーブリアンを支える基本的な思想傾向がそのまま表に出て来るということになる。

こう見ると、一等書記官に任命されてからアンギャン公処刑までの期間というのは、シャトーブリアンの第二の回心が起こった時期と考えることもでき、きわめて重要な移行期であったといえそうである。

注

- (1) 『シャトーブリアンの駐伊フランス大使館一等書記官任官』（中央学院大学法学論叢第33巻第1号 [通巻第52号]、2019年7月30日発行）
- (2) Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, tome I, éd. Maurice Levaillant et Georges Moulinier, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1951, p.500. 訳文は拙訳。必要に応じて意訳した箇所がある。以下の引用においても同様。
- (3) Ibid., pp.500-501.
- (4) Ibid., p.501.
- (5) Jacques Alain de Sédouy, *Chateaubriand Un diplomate insolite*, Perrin, 1992., p.47.
- (6) Ibid., p.51.
- (7) Ibid., p.53.
- (8) Ibid., p.58.
- (9) Ibid., p.59.
- (10) Op.cit., (Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, tome I), p.534.
- (11) Chateaubriand, *Essai sur les révolutions Génie du christianisme*, éd. Maurice Regard, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1978, p.1282.